

◇編集後記◇

仕事の関係で、林業従事者の皆様から夏場の熱中症について話をお聞きしたことがあります。「冬の寒さは上に着れば凌げるが、夏の暑さはどうにもならない」と、昨年の猛暑はかなり大変だったようです。一方、この度の年末年始の寒さは、西日本で際だったようですが、天気予報で、中四国、九州地方等の気温の低さ、積雪量を見て驚いています。そうは言っても屋外での作業では冬場の寒さも大変だろうと想像しています。猛暑の年には寒い冬。季節感を失いつつある日本において、自然が私たちにそれを呼び起こさせようとしているかのようです。

編集の役を果たす傍ら、この分野の世界各国の現状について思いをめぐらせております。JOHが国際誌として次第に認知されるようになり、アジアだけでなくヨーロッパ各国からの投稿も増えてきております。おおまかな地域別の割合を調べてもらったところ、アジアが40%、ヨーロッパが30%、アフリカ・中東が20%、北米が5%、中南米・オセアニアが5%（中南米はほぼゼロ）なのだそうです。残念ながら北米等投稿が少ない地域があるので、世界の産業衛生の現状が見渡せるというわけにはいきませんが、それぞれの国の実情をよく反映しているように感じます。特にField studies をみるとよくわかります。しかし、危険きわまりない作業環境が

世界にはまだたくさん放置されている一方、背景は異なるもののメンタルヘルスなどの問題が世界共通の課題になってきているなど、複雑な様相も呈しています。世界の産業衛生の動向にも注目して行きたいと思います。

ScholarOne Manuscriptsが本格稼働し、私たちも最初は慣れない操作にとまどいましたが、操作してみると非常によくできているように感じます。こういうものは世界共通に合理的にできているようです。日本の読者の皆様も怖がらずJOHにどしどし投稿して頂けたらと思います。

今回の産業衛生学雑誌の原著論文は一つと少なかったのですが、救命救急センター看護師の心理的ストレスに関する研究です。あらゆる職場でメンタルヘルスは大きな問題ですが、共通する背景と、また救命救急センター看護師という職種による特徴もあり、興味深い報告です。和文誌も総説だけでなく、原著や調査報告、短報という形で、日本国内の産業衛生に関する研究成果が数多く報告されており、昨年度より数は増加しています。和文誌は和文誌の役割があり、国内での注目を図ることが重要なテーマもあります。和文誌、国際誌ともその役割が果たせるように、それぞれに充実させたいものだと思います。

(福島哲仁)

「産業衛生学雑誌」編集委員会

委員長：川上憲人（東京大）

副委員長：荒木田美香子（国際医療福祉大）、井上和男（帝京大）、上島通浩（名古屋市立大）、
車谷典男（奈良医大）、堤 明純（産業医大）、福島哲仁（福島医大）、森本泰夫（産業医大）

有澤孝吉（徳島大）、石竹達也（久留米大）、市場正良（佐賀大）、小笹晃太郎（放射線影響研究所）、掛本知里（東京有明医療大）、川口陽子（東京医歯大）、熊谷信二（産業医大）、黒沢洋一（鳥取大）、河野公一（大阪医大）、酒井一博（労働科学研）、榊原久孝（名古屋大）、澤田晋一（独法労働安全衛生総研）、塩飽邦憲（鳥根大）、菅沼成文（高知大）、笠島 茂（三重大）、埴田和史（滋賀医大）、竹内 亨（鹿児島大）、田中昭代（九州大）、谷川武（愛媛大）、土井由利子（国立保健医療科学院）、中尾睦宏（帝京大）、橋本英樹（東京大）、馬場園明（九州大）、濱田篤郎（東京医大）、丸山総一郎（神戸親和女子大）、三木明子（筑波大）、村田勝敬（秋田大）、森 満（札幌医大）、森河裕子（金沢医大）、八幡勝也（産業医大）、吉田貴彦（旭川医大）、若林一郎（兵庫医大）、渡辺博且（産業医大）

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目29番地8 公衆衛生ビル4階

電話 03-3356-1536 ファックス 03-5362-3746 振替 東京 00100-7-133495 番